

114
A 3795



茶試驗表
茶名

第一種	折物
第二種	玉露
第三種	薄茶
第四種	濃茶
第五種	飛出茶
第六種	晚茶
第七種	輸出茶
第八種	支那練茶

大正十一年四月
農務省
茶業課

1330



第九種 支那黑茶
第十種 支那紅茶
第十一種 支那綠茶
第十二種 日本紅茶

然テ茶ノ成分ハ、性、油、コロ、ヒール、鞣素テーカラフト茶ノ効カ、後則チア、テ、ル及ヒ燒灰鉄、マンガン等ヨリナルト、テ、イン、ヲ、總、稱、ス虫氏茶ノ品等ハ、ヲ、含、ムテーカラフトノ多少ニ関ルカ故ニ今品等ヲ表スルニハ先ツ茶ヲエートル三分アルコトニ

一分ノ混液ニ蘸シテーカラフトヲ浸出シ其多少ヲ量リ又タ更ニ茶ヲ焚燒シ殘餘ノ燒灰ヲ定量ス此ノ兩件ニ因テ大畧其品等ヲ表スルニ足ルト、テ、大、畧、其、品、等、ヲ、表、ス、ル、ニ、足、ル、ト、虫、氏、テ、ー、カ、ラ、フ、ト、所、含、ノ、原、質、中、鞣、素、テ、ー、イ、ン、ノ、分、量、又、少、ク、差、異、ナ、キ、ヲ、能、ハ、ス故ニ鞣素テ、ー、イ、ン、ヲ、定、量、シ、テ、別、ニ、表中ニ記載ス

茶名	百分効力	百分鞣素	百分テニ	百分焼灰
折物	二九、七七	一四、二〇	二、九三	五、九七
玉露	三四、〇〇	一五、六〇	二、四二	五、八〇
薄茶	三五、七五	二二、七二	三、四四	六、一五
濃茶	三五、六五	二五、二〇	四、二一	六、〇五
飛出茶	二九、一二	一四、二〇	四、一五	四、九七
晚茶	二七、七五	一三、〇六	一、九八	五、〇六
輸出茶	三〇、四〇	二三、九五	二、五七	四、六八
友那練茶	三六、〇〇	一九、八八	三、三六	四、一〇
友那黒茶	三〇、八五	一四、〇六	四、六七	五、六〇

友那紅茶	三三、〇七	一四、二〇	二、九四	五、六〇
友那緑茶	三七、三五	一五、九五	二、九三	五、七三
日本紅茶	三六、二五	一五、七五	二、九六	五、二八

右ノ表ニ由テ之ヲ觀ルニ日本製茶ハ友那製茶ノ如ク鞣素及ヒテ一インニ富メル故ニ其滋養ノ効他ノ茶類ノ右ニ出ツルヲ知ルハシ〇又其焼灰ハ諸種ノ茶ニ於テ百分ノ四ヨリ百分ノ六ノ間ニ在リ之レ其ノ質偽ノ品ニ非サ

ルテ證スルニ足ル
 支那製茶ノ多ク稱譽ヲ得ル所以ノモ
 ノハ其製造ノ時ニ當テ他ノ香竈ナル
 樹葉若クハ草花ヲ和シ其香分ヲ分與
 スルニ在ルノニ日本製ノ茶ニ在テハ
 之レアルトナシ
 上ニ舉グル諸種ノ茶中悉クマンガ
 ヲ含ム之ヲ定量スルニ芽一種ニ在テ
 ハ百分ハ一〇四芽二種ニ在テハ百分
 ノ〇、二一ナリ其他大抵之ニ同シ試ニ

青葉ヲ取り焼テ灰トナシ之ヲ検査ス
 ルニ猶ホマンガヲ檢出ス仍テ此ノ
 マンガンハ日本茶樹固有ノ成分ナル
 ト知ルヘシ
 テーインハ諸種ノ茶中ウーレ氏ノ法
 ニ從テ試檢スルニ結晶形トナリテ分
 離ス
 鞣素ハヘーリン氏及ヒエレル氏ノ
 法ニ由テ之ヲ試檢ス

茶効害

茶ハカメリヤセリ即チ山茶樹ノ種属ニシテ其成分第一テロイン其他鞣素エリテル性ト油色素マンガニン等ナリ尚ホ試験表ニ詳ナリ

茶(及ヒココロヒ)烟草シヨコラリデ香料酒類ハ穀内果菜等ノ如ク之ヲ飲服スレハ体中ニ在テ真ニ体質ノ消耗ヲ補全スルモノニ非スト余氏衆人一般其ノ原智ニ由テ嗜好スル所ノ飲料ニシテ衛生上ニ在テ其効用又タ輕カラサ

ルモノナリトス仍テ其効害ヲ左ニ畧記ス

(効)適量ニ之ヲ服用スレハ神経統系ヲ刺衝シ精神ヲ鼓舞シ知考カラ増シ身体ヲ壯健ニス筋及ヒ神経等ノ如キ機械ニ血液ノ輸送ヲ催進シテ其作用ヲ注ニシ滋養ヲ助ケ筋肉ヲ健剛ナラシメ且ツ動脈管中ノ血壓ヲ強クシ尿ノ分泌ヲ増多ス饑渴ニ由テ身体始メテ衰弱スルモノハ之ヲ服スレハ一時壯

健ヲ覺フ然レ其甚シキモノハ在テハ
却テ害アリトス。○其中含ム所ノマン
ガン及ヒ鉄ハ体中血液製造ニ於テ甚
タ有効ノモノトス。○アンチモン製劑
及ヒ麻醉藥ノ消毒ニ用ヒテ効アリ
(害) 身体ヲ労働セス空シテ業ヲトル等
ノモノ身体栄養不及ノモノ飲食消化
不良ノモノ小兒及ヒ虚弱ノ婦人又々
之レニ慣レサルモノ等之レヲ多服ス
レハ害アリテ不眠頭痛腦充血消化不

良心悸動或ハ慢性哮喘等ノ症ヲ發ス
支那ニ於テ屢ニ茶ヲ質造スルニ他ノ
樹葉ヲ以テスルアリ其害又々甚シカ
ラス之レヲ監別スル甚タ易シ
洋靛阿仙藥丹荅或ハ他ノ綠色アル糖
物ヲ混和シテ緑茶ヲ質造スルモノハ
其害甚シ恐ルヘシトス

明治七年九月 実試

支那省同業易



文
部
大
学
印
刷
部